様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　1　日現在

機関番号：34310
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720119
研究課題名（和文）　中世後期の英文学における記述法としての「驚異」と古典受容
研究課題名（英文）　The “Marvel” as a Method of Description and Its Relationship to the Reception of Classical Literature in Late-Medieval English Literature

研究代表者
大沼 由布(ONUMA YU)
同志社大学・文学部・助教
研究者番号：10546667

研究成果の概要（和文）：
本研究は西洋文化を理解する上で欠かせない､ギリシア･ローマ文学の影響という問題を取り上げ、中でもその黎明期にあたる、中世の古典受容を調べている。具体的には､「驚異」という概念がどう捉えられていたかを、ギリシア語、ラテン語、中世フランス語、中世英語等の資料を用いて分析した。その結果、中世の驚異の概念が、西洋古典に基づきながらも、さらに複雑な視点を有し、自己認識の問題とより深く結びついている事が判明した。

研究成果の概要（英文）：
This project investigates the influence of Greek and Roman literature on the literature of the Middle Ages. In other words, it deals with an early phase of developments essential to the understanding of Western culture. The main focus of the project has to do with how “marvels” have been perceived. By analyzing a wide range of documents—written in Greek, Latin, Medieval French and English—I discovered that the Medieval concept of marvels, though derived from the classical period, is much more complex in perception, and much more deeply related to how people see themselves.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：中世英文学、驚異、古典の受容、英米文学、西洋古典

１．研究開始当初の背景

中世英文学において文学作品を執筆する事は、西洋古典をはじめとする先行文学を参照し、そこからモチーフやテーマを得て語り直す作業に他ならず、当時の作者・編纂者達がオリジナリティを発揮できるのは、内容ではなく、その語り口にあった。つまり、文学的権威である西洋古典がどの様に文化・宗教の違いを超えて用いられてきたかを調べる事は、中世人がどの様に作品を書き、受容したのかの解明につながって行く。中世文学において古典は重大な影響を持つ。権威として作品の題材を自らが記述するものに限定し、トロイア戦争やアレクサンダー大王は中英語ロマンスの題材としても取り上げられた。このように、ギリシ

ア・ローマという異国の高水準の文化・文学の吸収は、日本古典文学における漢詩などの中国文化の影響のように、中世英文学に大きくかかわってくる。しかし、中国文化は仏教をもたらし、それは日本に定着したが、西洋古典の背後にあるギリシア・ローマの多神教は、中世キリスト教諸国に宗教として根付く事はなかった。人々は異教の記述をキリスト教の中世社会に合うよう変えていき、このキリスト教化の過程がすなわち古典受容の過程となっていた。古典受容については様々な概観的研究があるが、実際個々の作品が文学の中でどの様に変化していったかが詳しく論じられるのは、一部の作家に限られている。このような研究の遅れには、言語や専門分野の違いに一因があるが、中世文学との直接の因果関係の可能性という限られた面のみに光が当てられているという面も見逃せない。

この状況を打破する為には、分野横断的に言語を始めとする知識をつけ、直接の因果関係の有無を検証する所謂ソース研究に止まらない視野を持って研究を進め、焦点となる中世の作品に至る迄の文学伝統を考察する事が肝要となってくる。その為には、モチーフ研究による古典の受容の考察が効果的であると研究代表者は考える。そしてその実践例が、2008 年に提出した博士号請求論文‘The Appropriation of Classical Literature in *Mandeville's Travels*’である。『マンデヴィルの旅行記』という 14 世紀の架空の旅行記をとりあげ、その作品が使用したソースだけでなく、背後に広がる文学伝統として古典を捉え直して分析したその結果、この作品がキリスト教徒への配慮を全体にわたって見せながら、それを隠れ蓑に、キリスト教化を抑えた形で古典から得た情報を扱っているという新たな可能性が窺えた。

その際、重要な記述法として働いたのが「驚異」という概念である。その重要さにもかかわらず、同時代の資料からの系統的な分析が不足しているため、この概念について、掘り下げる必要があると感じた。ここで注目しているのが、「驚異」についての分析を含む同時代の資料である、12 世紀の著作、ティルベリのゲルウァシウスの『皇帝の閑暇』である。この作品に加え、同時代の驚異と関連する作品を併せて分析し、中世後期の知識人にとっての「驚異」の概念について、現存する資料から明らかにしたい。

また、『マンデヴィルの旅行記』の古典受容を、当時の古典受容全般の中に位置づけ、その相対的な位置を探るために、中世後期の古典受容全般に対しても、考察する必要があると感じた。これについては、中世後期において古典文学の受容がどの様に行われていたかを百科事典や注釈を通して考える。古典文学の受容に関しては、古典作品に注釈をつけて、修道院等の教育機関でどの様に読んでいたかについての研究が進んでいる。また、しばしば説教の種本として、古典作品からの抜粋を編纂して *florilegia* と呼ばれるアンソロジーや、百科事典が作られていた。これらが古典の受容に与えた影響は大きい。この様な資料を参考にする事により、学問体系に変化が見えてくる 13 世紀から 15 世紀に至る迄の古典受容を整理したい。

２．研究の目的

本研究は、西洋文化を理解する上で欠かせない、ギリシア・ローマ文学の影響という問題を取り上げ、中でもその黎明期にあたる、ルネサンス以前の古典受容の実例を「驚異」という概念を鍵として検討するケース・スタディとなる事を目的とする。具体的には、以下のテーマを探求する。

（１）西洋古典が中世英文学に取り入れられる際、重要な役割をはたした「驚異」という概念について、同時代の資料を基にどう捉えられていたかを分析

（２）「驚異」と密接なかかわりを持つ、「奇跡」について、同時代の定義を検証

（３）古典作品への注釈や抜粋など、中世における古典の受容一般についての考察

さらに、本研究の重要な目的の一つは、「驚異」を、同時代の資料から定義しようという試みである。「驚異」という概念自体については既に論考があり、中世の驚異についても、主にフランスの学者達による研究がある。しかし、これらは、「驚異」を既に前提として資料を読み解く傾向にあり、その前提となる部分を、中世当時の資料に基づいて固めようとは必ずしもしていない。本研究は、中世人が「驚異」をどの様に認識していたのかを、同時代の資料から読取ることを目的としており、中世文学の研究において、アナクロニズムを避けるための重要な視座を提供するものと考える。また、「驚異」は中世文学を語る上で欠かせない概念であるため、この定義付けは、中世研究全体への貢献ともなり、中世人のメンタリティーや当時の文学作品の執筆にまつわる状況を浮き彫りに出来ると考える。

３．研究の方法

本研究は、「驚異」を、同時代の資料から定義するため、様々な言語の資料にあたり、そこから記述の変遷を追う。文学作品から当時のメンタリティーを読取り、現代にもつながるような、当時の人々の精神構造の一端を解き明かした。その際、特筆すべき点は、

「驚異」を記述対象に限らず、記述の為の手法と考え、モチーフ研究を流用して古典受容を研究するという特色である。この手法により、直接の影響の有無に拘泥する事なく、記述パターンとして関係があるかどうかに注目し、より広い視野で比較する事が可能になる。その結果、ギリシア・ローマの先行文献と中世文学との比較を、古代より中世の作品に至る迄の文学伝統を考察するために行うことが可能になり、実際の受容のパターンを調べながらも、古典が総体としてどのように中世文学の執筆に係わっているかを明らかにする事ができる。モチーフ研究それ自体は古くからある手法だが、この方法を用いて中世の古典受容を研究した先行研究は研究代表者の知る限り存在しない。ソース研究ではなくテクスト相互の関係に注目する事の利点は、対照とする作品以前又は同時代に存在した別の古典受容のパターンも見えてくるため、編纂者が実際に行った結果だけでなく、選ぶ事もできたが選ばなかった選択肢を考察し、そこに隠された意図を探れる点にもある。この方法論が確立されれば、先行作品の焼き直しという中世作品の特徴上、広く適用可能と考えられるため、中世の文学と中世人のメンタリティー解明に向けて、大きく貢献できると思われる。

４．研究成果

平成 23 年度は、西洋古典の「驚異」の概念と、中世のそれとが、どのように異なっているかを、同時代の資料を基に分析した。その研究成果を、7 月にイギリスで行われた国際学会で発表を行って発信した。ここではそれぞれの時代の旅行記・地誌などの比較を通して論じた。あくまでも中心を自らの世界におく古典の記述に対し、中世の人々は古典という権威に基づきながらも、自らの視点だけでなく、他者の視点から見た自分たちの姿も考慮に入れるようになっており、中世の記述では、驚異というものが、物質固有ではなく見るものの視点によって決まるのだという認識を見てとることができた。こうして、現代にもつながるような、当時の人々の精神構造の一端を解き明かした。

この内容を発展させ、物質とその特性とを切り離してとらえるという中世の驚異認識の独自性についての論を平成 23 年の秋から冬にかけて執筆した。これをおさめた書籍がオランダの出版社から刊行される予定であったが、本の出版自体が結局は断念されたため、論文を書きなおして学術雑誌へ投稿し、平成 24 年 11 月に刊行の予定である。

平成 24 年度は、これまでの研究で自然現象の記述を分析の主体にしていたのに対し、中世当時には魔術とも目された automata とよばれる機械仕掛けの鳥や馬の分析を主に行った。その成果は、韓国で行われた国際学会で発表した。内容としては、automata が、中世英文学作品およびラテン語作品でどのように描写されているかを分析し、それが中世においては、自己認識の道具として機能していたと主張した。従来 automata といえば、初期近代のものが注目され、機動のメカニズムなども重視されていたが、本研究では、まだ魔術と科学との分水嶺がはっきりしない時代だからこそ、それをどうとらえるかという問題を、自己の認識と結び付けられるのだと言うことを示した。

こうして、本研究により、「驚異」などの超自然は個人の認識と深く結び付くものだという事が確認され、さらに、その結び付きの度合いは、時代により異なるという事が示された。つまり、どのようなものが驚異として認識されるかは、認識する人間次第である、という事実が、物語の中で驚異の記述姿勢に反映されるのは、中世になってからと推察されるのである。中世が古典古代よりも優れた面を有しているという指摘は、これまでの「暗黒の中世」というイメージを覆す新たな面を示していると言えよう。

驚異、魔術といった超自然現象に関する文学研究は国内ではあまり行われていないように思うが、国際的には注目されつつある分野であり、それをテーマにした国際学会が行われるようにもなっている。その中でも、本研究のように時代をまたぎ、具体的に変遷を追うものは多くはない。そのためか、平成 23 年度の国際学会での反応をきくと、十分説明しきれていない面もあったように思うが、論文ではそれをふまえてより説得力のある形へと発展させている。また、ヨーロッパのみならず、東洋を視野にいれた驚異譚の研究プロジェクトにも参加し、より幅広い文脈から理解できるよう努めている。国際的な学術交流事業の中で、人文科学の最先端研究として、研究成果を発表する事も決定した。

今後の研究の進め方としては、中世人の認識という問題について、驚異に限らず、広く超自然現象がどう捉えられていたかをより深く追求し、神学や科学といった問題も視野に入れながら研究を行う予定であり、あらたな科学研究費のプロジェクトとして採択されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

1. 大沼由布、Through the Eyes of Travellers: Classical and Medieval Views of Exotic Marvels, Studies in

Medieval English Language and Literature, 査読有、27 巻, 2012, 掲載決定

〔学会発表〕（計 2 件）

1. 大沼由布、Animated Creatures of the East: Magic and the Automaton in the Middle Ages, MEMESAK（Medieval and Early Modern English Studies Association of Korea）International Conference, 2011 年 10 月 28 日、ソウル大学（韓国・ソウル）
2. 大沼由布、Through the Eyes of Travellers: Classical and Medieval Views on Marvels, The International Medieval Congress, 2010 年 7 月 15 日, リーズ大学（英国・リーズ）

６．研究組織

(1)研究代表者

大沼　由布（ONUMA YU）
同志社大学・文学部・助教
研究者番号：10546667